

大学出版

'96 秋

No.31



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会



大学出版
31号

Autumn · 1996

読書の周辺 「本」と「読むこと」の変貌	1	本田 和子
読書の周辺 貨幣をめぐるイメージ	6	飯田 裕康
一九九六年度 夏季研修会報告	11	山本 俊明
第一回「拡大編集部会」報告	14	望月 厚志
「学術研究成果の刊行助成についてのアンケート調査」を終えて	16	三浦 義博
歩く・見る・聞く―知のネットワーク	18	5
大学出版部ニュース	20	
新刊案内'96・7・96・9	28	
製作の現場から	15	表 3

「本」と「読むこと」の変貌

本田 和子

巻物形式の文書は、読む人に、読み進むために双方の手で「繰り延べること」を求めた。従って、読む人は、無自覚ながら両の手の密やかな運動を伴侶としつつ、綴られた文字を目で追い、語られる中身に寄り添う楽しみを酔ったことだろう。

そして、書かれたものが冊子形式に変わると、読む人には、片手で「ページをめくること」が要求される。読書する人たちは、記された二行一行を目で辿り、その視野に最後の一行が捉えられるや否や、ほぼ無意識のうちに利き手を動かしてページをめくった。めくられることで、書かれたものは、読む人の前に新しい世界を開示する。それは、昨年蒔かれた種が発芽し、翌年につややかな枝葉を茂らせるのにも似て、主題的には前ページと連なりつつ、しかも、次ページにおいて初めて可能となる新たな文脈の生成に他ならない。

従って、読書家の特権は、自身がページをめくることによってのみ生まれ出る、言葉や文章に立ち会うことの快樂

だったとも言えよう。何しろ、めくる人との出会いがなければ、書かれたものは、その表紙だけを衆の視線に晒して、ひたすらに沈黙を守る紙の集積に過ぎないのだから。

文字情報が、ハイテク機器のネットワークを通じて伝達され、それらは画面で読まれることになって受け手のものとなる。いわゆる「電子ブック」時代の到来が囁かれて久しい。いまでも、すべてとは言わぬまでも、自然科学系、社会・経済学系など、かなりの分野でそれが現実のものとなりつつある。とすれば、書物とは、繰り延べるものでもめくられるものでもなく、キーやマウスの操作によって、画面に呼び出された文字その他の記号を凝視させることで情報を伝えるものとなる。そして読者は、書物に集積された情報内容を、呼び出し凝視することを通じて受容するということになろう。

文字が発明されて以来、私どもの社会は、文字で書かれたものを文書という形式に整えることで、知識の蓄積や情報共有に役立ててきた。しかし、改めて振り返るなら、

文書の形式・様態の変化は、それを受け止める人に対して、それぞれに異なったかかわり方を要請している。例えば、先に見てきたように、「繰り延べること」「めくること」そして「見つめること」などのように……。とすれば、こうしたかかわりの変貌は、文書と私も読み手の間に、何をもちたらし何を奪い取っていくのだろうか。

◇ ◇ ◇

わが国の場合、文字で書かれたものが、広く衆の手に取られるようになったのは、江戸時代中期以降であろう。

「江戸」に代表される大都市の出現は、人々の生活の情報依存度を大にして、庶民レベルの暮らしにも文字を不可避のものとした。かつて人々は、村落共同体の共通の信仰と慣習に守られて、格別に問うことも迷うこともなく、極言すれば「暮らし」なるものを意識にのぼせることすらなくて、周辺の人々と日々を共にするのが常であった。

しかし、都市の暮らしは、そこに暮らし人々から共有された基盤を奪って、衣食住、あるいは冠婚葬祭・病人の世話・子育てなど、日常の暮らしの細目を意識的に選択・決定することを求め始める。この季節には何を身に纏うべきか、また、この食材はいかに調理すべきなのだろうか。子どもが生まれたら、いつ何をすればよいか、あるいは、そのしつけは、どのようになされるべきなのだろうか。

村落共同体のなかで、無意図的・無自覚的に身体を通じて継承され獲得されてきた暮らしの知恵が、言葉レベルの

情報として、改めて意識的に伝達・受容されるものと化した。さらには、語られる言葉の不確かさを超えるべく、それらが文字情報として広く巷を徘徊するようになるのに、何ほどの時間も不要であった。瓦版や生活百科の啓蒙書が活況を呈したのは、その端的な証しである。江戸中期、都市生活を襲ったこのコミュニケーション革命は、当時の人々にとって一種のカルチャー・ショックとして機能したに相違ない。

「文字が読める」ということは、他よりも早く他よりも有利な、賢い暮らし方を体得する手段である。四季にまつわる衣食住の整えや、育児にかかわる慣習・新知識など、暮らしの知恵を満載した女性向け教訓書は、女たちに対しても、「読める人」より「家政人」であると告げて、文字学習と読書への関心を煽るのに効果的であった。「寺子屋」と俗称される手習い塾の乱立と、それに通う子どももの急増も、こうした情報革命の所産である。この時代、女・子どもが文字文化に組み込まれたのは、ここに見てきたように、暮らしの知恵の蓄積と伝達の回路が、身体から言葉へ、そして「書かれたもの」へと推移していったことに負うものと見ても過言ではない。

◇ ◇ ◇

広く人々が文字文化と遭遇する機会を持ったとき、「書かれたもの」は、既に冊子という形式を獲得し、「本」と範疇化されるものとして装いを整えていた。従って、女・

子どもという新読者階層は、いずれも冊子本を手にとり、「めくる」という動作と連動させつつ、記されたことがらをわがものとすべく、「読む」という行為に参入したのである。

そのゆえでもあろうか、これら初心者向け冊子本に、前のページから次のページへ、読む人のめくる動作がスムーズであり得るよう、それなりの工夫が凝らされているのは……。たとえば、「往来物」と呼ばれる文字学習教材は、暮らしの節目節目の挨拶文の範型が、往復書簡形式で掲載されていて、それらの筆写を通じて、一通りの手紙文の書式と当用漢字の一切が、学習出来るように編集されていた。

手紙のやりとりが出来ること、すなわち、文字を通じての人付き合いが巧みであることは、確かに、実生活上の必要事であったに相違ない。しかし、それと同時に、「往復書簡」という、往信と返信が一対化されたこの形式は、後続する文書への興味を引き出すのに、優れて効果的だったと言えないだろうか。

仮に、前のページで、最初の赤ん坊の誕生を祝う文章を学習したとする。こうした手紙に対しては、どんな返事を書くべきなのだろうか。学習者たちは、ページをめくり、次に記された文章へと目を走らせずにはいられない。考えてみれば、「往来物」の編集の仕方は、冊子という書物形式と読者を結びつけることに關して、絶妙の対応を見せていると言えそうである。

さらには、往来物も女訓書と称される女性向け教訓書の類いも、いずれも、挿絵を挿入することで、読書初心者に興味と理解に応えようと腐心している。ページ毎に置かれたそれらの挿絵たちが、読む人の関心をそそったことは確かであろうし、次に続く内容を読むにまして、「描かれたもの」を見る楽しみが、ページをめくる手を急がせたであろうことも想像に難くない。

しかも、その絵のなかには、文の内容に相応しく、例えば、生まれ子を祝う文章に対して、子どもの「宮参り」の絵を例示して視覚的に理解の補いを企てるものがある。かと思えば、その反面、格別、文面とは無関係に思える名所旧跡の絵柄などを配して、単に紙面を見物する興味に配慮だけのものもあった。

さらには、点描される人物像が、その本の性格・内容と不似合いな衣装・風俗で紙面を飾り、文内容と挿絵との違和性と混在性が際立たされている場合も少なくない。たとえば、家人に仕え、家を守る心得を説いた女訓書の一ページに、優雅に佇んで山水の配された庭園を眺める女人が描き込まれる。しかも、その女人は、髪をおすべらかしよろしく長く背に流して、十二単まがいの衣装を身に纏っていたりするのでから、何とも奇妙と言う他はない。

江戸の女に向けて、極めて現実的な処世を説く紙面を、王朝風文化で香り付けしたともいうのだろうか。あるいは、文字・文章が庶民レベルのものともなり、女たち一般

が本と出会う機会を持つようになったため、その内容は多様化して単なる古典教養の域を超え、下世話な暮らしの細事にまで及ぶようにはなった。しかし、女性の教養基盤は依然として王朝文化にあるとする伝統が、なおもどこやらに息づいていて、こうしたキッチュな変容を蒙りつつもその存在を主張し続けたということだろうか。

いずれにしても、それら工夫された冊子作りによって、初歩的な読み手たちは、文に誘われ絵に誘われつつ倦むことなくページを繰った。もし仮に読む人の視線が、一行の文字、あるいは一枚のページ上に固着し、そこから移動することを厭うたなら、そして、読む人の手がめぐる動きを停止したなら、一冊の本は、読み手の前にその全貌を提示する機会を持ち得まい。何が続くかという文章に対する興味にせよ、あるいはどんな絵が現れるかという期待にしても、ともかく、続くページを読み手にめくらせることが、冊子形式の本に与えられた課題であった。結果として、本を読むという営みは、ページをめぐる手の運動と不可分となる。



読書生理の研究者たちは、概して、眼球とその運動を対象化し、文字を追う眼球の動きや読書速度と眼球移動の関係、あるいはその疲労の度合いなどを測定し法則化を試みようとする。しかし、手の動き、あるいは目と手の協応に焦点を合わせた研究は、余り見いだし難いように思われる

のだが、このことは、恐らく、読書行為を司る主要器官が目であることによって、読書行為もまた、優れて視運動にかかわるものと捉えられていることを物語っている。

確かに、運動生理学的見地から言えば、読書におけるページをめぐる行為など、取り上げるに値しない微細な動きかも知れない。が、しかし、近代以降の読者たちにとって、「読書」とは、冊子本と出会うってその内容を己のものとするものである。先に触れたように、冊子本を読み進むこと、すなわち、長方形の同じ形に切断され平たく重ねられて、綴じられた紙の各ページ毎に記された文章内容に繋がりを付け、ひとまとまりの意味内容として統合することは、「めぐる」という手の動きなしには不可能ではないか。そして、把握される文章世界は、その意味連環のディテールにおいてめぐる手に反映された読み手の意志と結託する。たとえば、疲れた読み手が読むことに飽きたとき、めぐる手も動かすことを逡巡して、読むことを中止しようか否かと迷うだろう。このとき、ぐずぐずとためらう手の動きは、ページからページへの連なりを希薄にするから、読み手は、一冊の本を、全体としてのまとまりを欠いたまま散漫と読み終えることになりかねない。一方、読み手が目のページ内容に魅了され、早く早くと先へ読み進むことを逸るとき、めぐる手は、自動機械のように素早く動いて、一刻も早い読破を志向する読み手の意志と伴走する。そして、読み進む意志は、文字を追う目の動きより一步先んじ

てよどみなく動く手の営みに助けられつつ、先のページから次のページへと途切れることなく移動し、文の指し示す終点に辿り着くまで持続されるのである。

それに、確認のために読み直すとき、あるいは、今一度、ふと読み返したいとページをめくり返すとき、手は、恰もその場所を記憶しているかのように素早く動いて、望むそのページを捜し出すのに協力してくれるだろう。こう考えるなら、「めくる手」は、「書かれたもの」が冊子形式の場合、読みの内容と読みの快楽とに、いかに密接にかかわり合っていることか。何しろ、めくる手のリズムは、ページからページへと文脈を織り紡ぐ、読み手にとっての「読み」のリズムでもあったのだから。となれば、私ども、冊子本の時代を生きた読み手として、「我が手」の内助に深く感謝しなければならぬのではないか。



ここ三、四百年の間、他を制圧して王座に着いていた冊子本が、その地位から降りようとしている。代わってその椅子に座るのは、紙や印刷活字と無縁の書物、すなわち、新しく出現した「電子ブック」でもあろうか。もちろん、印刷された活字本が、完全に消えてしまうなどいうことはないが、主役交替は否み難く、時代の必然と言うべきであろう。とすれば、当然のことながら、読み手に要求されるのは、これまでとは異なる新しい「読み」である。

それが、読み手のどのような能力に特に依存するのかは

定かではないが、少なくとも紙の集積を手に取り、その重みを確かめることから始まる読みの営みと、一ページ一ページを単位としながら、それをめくることで徴付けられている読みのリズムは、根底から異なったものへと変質されざるを得まい。何しろ、これまで、めくる手という協力者に支えられてきた読む人の視力は、この控えめながら強力な伴侶を失って、ただ目だけに依存した孤独な一人旅を余儀なくされるのだろうから。私どもにいま求められているのは、恐らく、「本」というものに対する抜本的な認識の更改であり、「読書」という営みに対する新しい対応に他ならない。

紙の手触りとインクの匂いを味わい、装丁家の労作に感謝しつつ、拙い原稿の見事な変身をしみじみと手に取っていとおしむ。こうした本作りの楽しみも、完全に消失するとは言わぬまでも、その機会が乏しくなることは確かであろう。ならば、せめていまのうち、心ゆくまで美しい装丁で、手に取って慈しまれるような本を作っておきたいと、私のような冊子本世代は、急速な時の流れを抗い難く肯定しながらも、こんな郷愁を交えた思いに捉えられることしきりである。

(聖学院大学人文学部教授)

貨幣をめぐるイメージ

飯田裕康

一九八〇年代後半からのいわゆる「バブル」経済の成長とその崩壊は、改めて「貨幣」とはなにかという古くかつ新しい問題を提起した。また、マイクロ・エレクトロニクス化をベースとした情報処理技術の革新的な進化は「エレクトロニク・マネー」をさえ生み出し、その使用の具体的検討に入っさえている。いまや貨幣論の時代といっても過言ではない。貨幣は経済学の諸領域のなかでもっとも重要な問題点であるにもかかわらず、今日までまともに扱われることがなかった論点でもある。こんなことをいうと、おそらく筆者の見識の狭さを非難されかねない。なるほど、経済学は今日まで貨幣を忘れたことはなかったのであるから、いまさらなんなのだということにもなるであろう。

たしかに、貨幣は経済学にとっていつも中心的な問題であった。しかし、それはおよそ貨幣をわれわれの生活世界の本質にかかわる重要な構成要素としてよりは、たんに経済的関係⇨取引関係を成り立たせ、円滑化する機能面から

取り扱われてきたにすぎなかったのである。あるいは、実物ベースの均衡的な経済にたいする疎外要因としてしか扱ってこなかった。経済学にとっては一種の応用問題でしかなかったのである。このように見ると、今日の貨幣論の流行といってもよいような論じられ方は、時代を画するものうち秘めているといっでよいであろう。

さて、貨幣に関してその役割を経済の日常的な運営から解き放って、社会関係形成原理ともいうべきレベルまでおりて論じたのは、おそらくアダム・スミスであったろうし、カール・マルクスであったであろう。例えば、アダム・スミスの場合はどうだったであろうか。

スミスは、すでに十七世紀の末にジョン・ロックによって主張された貨幣はそれを使う人々の一般的同意 consent によって貨幣でありうるという考えを受け入れながら、同時に他方、貨幣はそれと交換される他の財貨と同様に財貨であるとの考えももっていた。このような二重の貨幣観は、今日まであらゆる貨幣にかかわる言説のなかに陰に陽に存

在しているものであって、この点では一面で貨幣にかんして徹底した商品説を主張したと考えられているマルクスに
おいても例外ではない。

マルクスは『資本論』の全三巻でそれぞれの論議の展開に即して貨幣を問題としている。アダム・スミスの『国富論』がそうであるように、マルクスの『資本論』においても貨幣は全編の通奏低音といってよいような位置を、いまひとつの鍵概念である労働とともに与えられている。最近のように、『資本論』の編集をめぐってマルクスとエンゲルスの考え方の差異が議論されるようになり、マルクスの草稿そのものに即した研究成果が現れるにいたっている最近の研究状況に即しても、この事情は変わらないように思われる。それどころか、いっそう当てはまるようになってきている。『資本論』は第一部第一章と第二章において貨幣の生成を議論するが、その議論の方向は大いに異なる。一方では徹底した商品説をとりながら、他方では貨幣商品の選択にかんして商品所有者の行為そのものを原因としている。すくなくとも、交換の両当事者の合意にいたる「行為」なくしては貨幣は社会的に存在しえない。なぜマルクスがこのような二面的な貨幣生成論を展開しなければならなかったのか。この点を考える一つの素材は、岩井克人『貨幣論』（一九九三年、筑摩書房）に求めることができよう。岩井はマルクスの価値形態論を貨幣の生成の論理として検討し、マルクスのいう「貨幣形態」とそこまでの三つ

の価値形態とのあいだには大きな差異があるとして、貨幣生成の秘密に迫ろうとしている。

岩井の著作において興味深い点は、マルクスがこれまで価値形態として一つの枠組のなかで捉えられていた事柄に、二つの——場合によっては相容れないものとなる——論理が隠されていたことをあきらかにしようとした点にある。それは貨幣が商品の基礎から離れて貨幣としていくらでも独自に展開しうるものとなることを、古典古代以来の貨幣にかんするさまざまな観照をも参照系としつつ、示そうとしたことだといってよいであろう。岩井の著書の一貫した貨幣観とは、貨幣はそれが貨幣であるから貨幣なのだというものだといってよいが、このような一見自己撞的な議論がまかり通るのも、率直に貨幣の不可思議な本性に迫って、経済学が結局のところ忘却の彼方においてたまたましてきた問題に目を向けようとしているからなのである。

ではなぜ、これまでかくも思い切った議論ができなかったのであろうか。逆説的に聞こえるかもしれないが、経済学が貨幣をあまりにもまともに議論してきたことにあるのではないか。あるいは、経済学者が、こうした議論の危険性をそれなりに認識していたからではないのか。ヒュームやスミスの言説に明確に現れるように、貨幣は手段たるべきものであって、それ自体が目的ではならなかったのである。だとすれば、経済学者は実物の世界こそ大事に扱うべきだということになったのではなからうか。貨幣数

量説はまさにこうした思考の所産であったといえよう。

貨幣数量説や貨幣数量説的な考え方は、その淵源をたずねるとこれも古典古代のシヴィック・エス・社会的な社会にまで溯ることができる。このことは、貨幣的な日常がいかに悪魔的な一面をもっていたかを表している、と解釈してもよいだろう。人々が恐れたのは、貨幣使用が、それがもたらす便益を超えてしばしば災厄をもたらすことへの危機感の表現でもあった。むろん誰か聡明な為政者が、貨幣使用を強制したというようなものではなかったはずである。まさに貨幣は人々の日常のなかに自然に入り、それを破壊させたのである。そのような危機を百も承知の上で、人類は貨幣から離れることができなかつたのである。なぜそのような事態が生じるのか。

貨幣についての言説は洋の東西を問わず古今豊富に存在する。しかしそれはいつの時代にもつねにコンスタントに世に出ていたわけではない。人々がそれにとらわれ、振り回されてきたとはいっても、状況に浸りきっていられるときにはだれも貨幣とはなにかを問うことはしなかつたはずである。貨幣が議論の対象とされるにはそれ相当の状況が作られなければならないのである。それは、物価が恒常的に騰貴していくときとか、資産の価値が——たとえば株価の低落のように——急激に目減りしていくときとか、いずれにせよ手持ちの貨幣が予想を超えてその値打ちを失ってしまうようなときである。いわば、貨幣への信頼を喪失す

るときである。貨幣にたいしてイメージするものの喪失である。貨幣論史や貨幣史を見ていて不思議に思うことは、このような事態は、貴金屬鑄貨が使用されていたときであろうと、紙製の通貨が使用されていたときであろうと区別なく生じたことである。いかにそれ自体は無価値な紙きれであっても、いったんそれが「貨幣」となってしまうとそれらにたいする人々の感覚はまったく変化し、それらの素材を超えてしまう。

第二次世界大戦以後の学問的な進展のなかにあって、人類学とくに文化人類学や経済人類学の進展には注目すべきものがある。これらの分野が解明しようとした問題の一つに貨幣があつたことは敢えていうまでもない。カール・ポランニーのいう原始貨幣を持ち出すまでもなくこの問題の重要性は決して古型の社会にとどまるものではない(例えば、ポランニーの『人間の経済』Ⅱ 一九八〇年 岩波書店を参照)。問題の核心は、経済社会にとって貨幣とは何なのかではなく、まさに社会にとって貨幣とは何なのか、なのである。現代の貨幣や貨幣を使用する社会を計る尺度として、まさに現代的な問題だったのである。しかもそこにはれっきとした貨幣の機能が埋め込まれていたのである。原始貨幣はたんに象徴であつたり、抽象的な人間関係の紐帯であつたのではなく、古型の共同社会が、それを基準として活動の広さや深さを測るきわめて明示的な尺度の素材

だったのである。それを使用する主体は、実に明確に共同体の成員であった。かれらが、まさに貨幣を管理したのであってその逆ではなかった。そのような社会にあっては、貨幣にかんする言説もまた必要ではなかった。言説のないところに歴史は生じないから、このような社会においては、貨幣は人々の日常の思考のうちには入ってこない。思考回路のなかに貨幣は存在していなかったのである。

十七世紀の科学革命は、それまでの学問的な思考方法に一大変革をもたらした。そのひとつのトピックとしてハーベイによる血液循環の発見をあげることにも異論はあるまい。ハーベイの考え方はその後経済思想の面においても大きな変化をもたらしたといえよう。とりわけ貨幣にかんする人々の理論的な見方には、大きな影響を与えたといつてよいであろう。経済を一つの *body* と観念して把握しようとする考えは、ハーベイに先駆けてペイコンによって示されているが、この *body* を流れる血液とは一体何なのであるか。おそらくこの時代のエコノミストはおぼろげながらもそれを貨幣だと考えていたといつてよいように思われる。ただこのような貨幣にかんする人々の目に触れない言説は、十八世紀の経済思想のなかで初めて実物と貨幣の対抗関係にかんする言説を生み出し、魔術と混同されやすい貨幣の「力」にかんする冷静な学問的な検討を可能にすることになった。貨幣を理論的に操作するという方法も、ここにいたつてようやくその意義を認識されることとなるのである。

経済学の古典的な理論体系の完成者とみなされるデイヴィッド・リカードウは、彼の実業とも絡んで、貨幣に対してなみなみならぬ関心を持っていたし、ある意味では、貨幣にかんするその時代の思想を完成させたともいいうる。彼は紙製の通貨でさえ、貴金属 \parallel 金と同等の資格と価値をもつべきだとして、当時の貨幣金融政策を批判した。リカードウにとっては貨幣は見えないなにかを表し、人々を暗黙のうちにしぼっているものではなく、日々それをめぐつて格闘しているようなものと映っていた。しかし、リカードウにおいてさえ、貨幣的な利害から疎外され、むなく日々を送る人々の存在もまた、しっかりと押さえられていたのである。ここではじめて貨幣にたいする「管理」という思想が生まれるのである。なんとしても貨幣を押さえ込んでおきたい、これが当時の「労働階級」に同情を寄せたりカードウの貨幣との闘いだったといつてよいであろう。

かくして、われわれが対象とする貨幣は本来的に歴史的なものであるとともに、discursive なものである。

貨幣はいうまでもなく文学の素材でもある。貨幣にかんする隠喩を含まない文学作品を探し出すのに困難を感じるほどに、貨幣は文学を規定しているといつてもよいだろう。言語と同様に人々を思つてもみなかった環境のなかに連れ込んでしまうような力を持つものとして、貨幣は不可思議な力を持っていると観念されている。マルクスが『資本論』

のなかでしばしばシェイクスピアを引き合いに出すとき、それは必ずといってよいほど貨幣にかんする言説を含む。シェイクスピアのコメディーで観客が笑いのうちに見過ごしてしまふような台詞が、あとで振り返ってみると見事に貨幣にかんする言説であつたりする。「ヴェニス商人」の肉一ポンドにしても、あの台詞のコンテキストを考えてみると、貨幣的な言説の作り出す似非人間関係を暴きたす仕掛けになっているとみられないことはない。個人が他の個人と疎遠な関係をつくりだそうとすればするほど、貨幣の *discursive* な本性がその距離を埋めようとする。

そのような貨幣の本性を表す語彙として、イメージ *image* という語を取り出すことができる。この語はその後 *fiction* という語にまで発展する。人々が——市場社会で——自分を一枚のコイン（むろん紙製の通貨だつてかまわない）に託して他人とかかわろうとする瞬間から、人々は生身の貴金属よりは刻印された——あるいはプリントされた——文字と貨幣素材（金属とか紙とか）の表象的な姿とで、自らと等価な他人をコインの上にイメージする。十六、七世紀の経済にかんする古版本にしばしば登場するこのイメージという言葉は、貨幣が人と人を当事者が意識しないにもかかわらずそれぞれの人格とはまったく異なった「もの」によって結びつけようとする共通の言葉として現れてくる。素材そのもののイメージとそれを手段として使う主体のイメージとが相重なるところに、あるいは、労働のような実

存の根源をそれに吸収してしまふところに、貨幣の本性が潜んでいるといつてよいのではなからうか。

（慶應義塾大学経済学部教授）

一九九六年度 夏季研修会報告

山本俊明

大学出版部協会の一九九六年度夏季研修会が八月二十九日から三十一日にかけて、東海大学山中湖セミナーハウスを会場に開催された。北海道大学図書刊行会から九州大学出版部まで、二十一大学出版部から総勢七十四名が参加した。今回の研修会は、編集者としての志なかばで、七月に冥界に入られた京都大学学術出版会の八木俊樹氏の冥福を祈る黙祷をもって始められた。

編集者と出版経営

講演のひとつは、玉川大学出版部で四十年近くにわたって編集・経営に携わってこられ、三月に退職された関野利之氏（大学出版部協会顧問）による「編集者生活と出版経営」であった。講演の前半では、企画から製作までを含む著者に視点をおいた編集活動と、読者に視点をおいた営業・普及活動には接点がないとされるが、これは切り離されるべきではなく統合されるべきとする関野氏の持論を力説された。多くの出版部では、編集と営業の担当を分けており、出版部の規模によっては、編集と製作も分けられる。これら全体を統合し判断することは経営者の観点と言えるが、

編集あるいは営業の担当者において、直接製作費だけでなく広告費、倉庫管理費などの間接費を含めたコスト意識が薄れがちであることは事実である。読者が限られ、製作費の回収も困難な学術書を長期間にわたって継続して出版していくためには、編集・営業の枠をこえた視点が必要である。

講演の後半は、玉川大学出版部のケーススタディとも言ふべきものであった。学園の創立と同時に発足し、七十年におよぶ歴史をもつ出版部は、学園の教育理念に深く結びついた「教育・哲学・芸術・宗教」のジャンルを明確にして出版活動を展開している。しかし、大学の収益事業に位置づけられている出版部は、学校経営の状態とも密接に関わらざるをえないことも率直に語られた。とくに玉川大学出版部の特色ともいえる百科辞典の刊行で得た収益はそのすべてを出版部の資金として使えない状況があり、その中で、いかに出版活動を続けてきたか、あるいは百科辞典の編集・製作に携わった人員を刊行完了後に出版部内でいかに吸収してきたかなど、困難な課題にどのように取り組んでこられたかを淡々と語られた。

出版VANとどう取り組むか

第二日目の講演は小学館宣伝部長、黒木重昭氏の「出版VANとどう取り組むか」であった。出版・書籍販売にコンピュータが導入され、業務に著しい改善をもたらしてきているが、書籍流通にもコンピュータ化の波は押し寄せている。それを受けて七年前から、日本出版取次協会と日本書籍出版協会が出版社と取次店の間で情報をコンピュータを通して交換する研究を始め、すでに七十社が日販と、二十社がトーハント、そして四十社が大阪屋とコンピュータで接続し、受発注業務を遂行しているし、近い将来には電子情報だけによる取引決済も実施されようとしている。

現在は書店から注文短冊を取次店に出し、取次店全体で一日百二十万枚に及ぶ注文短冊を処理し、出版社に注文が届くまでに最高で五日かかっている。その改善をはかり、短期間で効率よく情報を流通させることが統一出版VANの第一の目的である。そこでの課題は、新刊・重版・在庫・絶版などの情報を正しく迅速に流すことで、情報が一元化される必要がある。書名・著者名・頁数などのデータベースを作成する委員会が構成され、統一規格をつくる話し合いが始まっている。また将来は出版情報センターが作られ、読者はインターネットを通して書誌情報を手にすることができるのではないか。

確かに、書店から取次、取次から出版社への情報のやり取りは迅速に、正確になることは期待できる。しかし、講

演後の質疑応答で出された、インターネットで書籍情報を得た読者がいち早く書籍を入手することのできる流通改善はどのようになされるのか、あるいは出版VAN導入にかかる現在の高いコストをどう低く抑えるかの問題は、今後さらに検討を要する課題である。

大学出版部ケーススタディ

現在二十二の大学出版部が協会に加盟しているが、その組織形態は、学校法人、財団法人、株式会社などさまざまで、規模・出版内容もそれぞれ異なる。夏季研修会の恒例となっている各出版部のケーススタディはその個性ある出版部の活動を報告しあい、課題を共有しようとするものである。今回は、九州大学出版部と昨年新規加盟した専修大学出版部をケースとして、それぞれ九州大学出版部の藤木雅幸氏、専修大学出版部の舟木英伸氏と笹岡五郎氏が資料をもとに報告された。

九州大学出版部は、九州を中心とした西日本にある二十九大学が加盟している出版部であり、今年三月に出版部創立二十周年を迎えた。設立目的にあるように「民間出版社において採算上引き受けられないような優良学術図書の刊行頒布」を目指してきた。しかし学術書の刊行を継続するためには、各種の資金が必要であり、大学からの出版資金、著者の提供する資金のほか、日本生命財団の刊行助成制度でこれまで二十点ほど、また、文部省の研究成果公開促進費

も毎年十点ぐらい助成を受けて出版してきている。ここ数年、毎年売り上げ増になっており、一方支出増にもなっているが、累積赤字が解消されたとのことである。

課題は第一に、組織の再検討で、理事、評議員、また現在有志の集まりである編集企画委員の役割を見直すことである。第二はレフェリー制の導入である。大学出版部のレベルを維持し、また存続する理由を確固としたものにするためにも、原稿の評価は欠かせない。また最近増えてきている持ち込み原稿を審査するためにもレフェリー制度を設けることである。

九州大学出版会は、二十周年記念として創立から十年間に刊行された良書を九点新装復刊した。小部数であっても必要とする読者に書籍を提供する学術出版社として着実に歩みをつけていることがここにも窺える。

専修大学出版局は、駐車場の管理などのために設立された(株)専大センチュリーの中に一九七四年に設立された。それ以来、九二年まで大学百年史、紀要などを製作してきた。九三年に大学将来構想企画検討会において出版局の活性化が審議され、出版企画委員会が設置され、人文・社会科学系の良書を出版する方針が決まった。

いわば大学の変革期に大学出版部が新しい理念のもと再出発しようとしているケースである。「出版主体としての組織のあり方」など課題は多くあるようであるが、一般読者を想定した啓蒙書を中心にして、意欲的な出版活動を展

開しようとしている。

この他、研修会では、編集・営業・刊行助成部会、幹事懇談会の四つの部会・グループに分かれて協議・研修を行った。特筆すべきことは、刊行助成部会に日本生命財団事業助成部長の野添幸男氏をお招きして、助成方針についてお話をうかがったことである。十八回に及ぶ日本生命財団の出版助成制度であるが、担当者の方とこのような懇談の時間を持つのははじめてのことである。助成対象である①史料の保存・研究、②心身の健康、③環境、の分野の理解の仕方、特に近現代史が史料の分野に入るのかなど、財団の基本的な考えをうかがうことができた。

今回の研修会には全体の主題はなかったが、開会の挨拶で山下正幹理事長が言われたように「大学改革の中で大学出版部がどのような役割を果たせるか」が隠れた主題であったように思う。また、将来の展望として、インターネットと出版の関わりが話題になった。インターネットの普及は流通の改善だけでなく、大学教育、また学術書の性格をも大きく変えていくことが予感される。学術書において書籍という形態はどのようになっていくのだろうか。そのような思いを抱きながら山中湖を後にした。

(聖学院大学出版会)

第一回「拡大編集部会」報告

望月厚志

大学出版部協会編集部会では、今年度より「拡大編集部会」を行うことになった。在京以外の部会担当者および製作部などの関連部署の担当者を交えて、本づくりをよりトータルな視点で考えようという趣旨である。

第一回目の拡大編集部会は、六月二十八日から二十九日にかけて野村保恵氏（あるふあ企画代表取締役）を講師にお招きして行われた。テーマは「CTS時代の割付・校正」である。

改めて言うまでもなく、文字組版は劇的に変化し、ここ十年ほどで活字組版はほとんど消えてしまった。現在の主流はコンピュータを利用した電算植字であり、さらにはDTPが急速に台頭してきている。これらは電子化された文字情報を、やはりデジタル世界の所産である組版ソフトで組んでいくという工程を経るのであるが、デジタル化が進むことによって新たな問題点や留意点が浮上してきている。それを再確認し、再点検してみるというのが今回のテーマである。以下でその内容を簡単にまとめてみたい。

■文字情報の入力

文字情報の入力は、現在ではほとんどが、かな漢字変換

方式（日本語ワードプロセッサによるものである。著者によるフロッピーディスク原稿はもちろんのこと、手書き原稿を印刷所に入稿しても、それは入力センターでワープロに打ち込まれることがほとんどである）。

かな漢字変換方式は、原稿を見て何と読むかを判断して入力する、文字の読みから入る方法であるが、一方で文字の形から判断し入力する方式もある。その代表が多段シフト方式である。これは盤面から必要な文字を特定していく方法であるが、習熟に時間がかかるなどの理由により、いまでは文字入力の主流はワープロに移行している。

■字体の混乱

先だって「『鷗』か『鷗』か」ワープロ漢字、基準作りへ」という記事が新聞紙面を賑わせたが、ワープロ入力の一般化によって漢字の字体についての問題が取り沙汰されている。ワープロやパソコンで使われている漢字の字体は情報交換用漢字符号（JIS X 0208）に基づいている。しかし、伝統的な字体とかなり異なる字体の漢字があるのだ。

本づくりのうえでは常用漢字の新字体は用いるが、それ以外の字体は従来 of 正字を用いるというのが一般的な考え

方であった。しかし現在では、このような経緯と問題点をふまえてどの字体を用いるか判断する必要がある。

■組版プログラムとオペレーター

コンピュータによる組版とは、活字組版の植字工の頭になかにあつた知識と経験を、プログラムの形にしてコンピュータに代行させるものである。しかし、組版に関するすべてをプログラム任せにしてよいかというと、そのようなことは決してない。

日本語組版はただでさえ禁則処理やルビ処理という難しさを抱えている。加えて和欧混濬文となると、和文と欧文の両方の禁則処理をまとめるため、プログラムだけでは処理できない。それを補完するのは、結局は人⇨オペレーターである。

しかし、活字組版の植字工のほとんどは十年、二十年も経験の積んできた熟練者であつたのに対し、電算植字のオペレーターは二、三年の経験者が普通である。組版ルールに不案内で、プログラム操作に関するノウハウの蓄積が浅い場合が少なくないのである。

■校正記号と校正

原稿整理時に入れる指定記号や校正時に入れる校正記号は、JIS Z 8208 印刷校正記号に則したものをを用いるが、この校正記号自体、活字組版時代に制定されたものなので現状に合わない部分がある。また、現場の作業者がこの記号の意味を理解できるとは限らなくなっている。そのため、

適宜、ことばで補う必要がある。

校正の際には、文字入力や組版プログラムの特性を念頭におき、どこでどのようなミスが発生しやすいかを類推しながら作業する必要がある。

■毎回新組

校正刷にアカが入つた場合、コンピュータは修正が入つた箇所だけでなく、組みの頭から計算をやり直す。禁則処理などは基本的にコンピュータの自動処理に任せているため、出力するたびに違つた組体裁になつてしまうことがある。校正刷は、毎回新組である。

以上、まことに大雑把ながら野村氏のお話をまとめてみたが、このほかにも興味深い示唆をいただいたのは言うまでもない。

これまでの日本語組版は、専門的な知識と技術をもつ、ひとにぎりの職人のものだった。しかし出版・印刷業界に押し寄せたデジタル化の波は、文字組版を一気に民主化してしまつた。ある程度の知識と意思をもっているならば、誰でも文字組版の世界に入れるようになったのである。

デジタル化が進んだといっても、それを生かすも殺すも結局は「人」である。文字組版は長い年月を経て形成されたひとつの文化。これを維持し守るのはいったい誰なのか。今回の拡大編集部会では、この大きな課題がわれわれ出版界の人間に課せられているということを、大いに認識させられた。

(専修大学出版局)

「学術研究成果の刊行助成についてのアンケート調査」を終えて

三浦義博

●はじめに

一九九五年版の「私立大学における学術研究成果の刊行助成制度一覧」および「アンケート集計報告」が完成し、大学出版部協会の加盟会員に渡したのは、協会の通常総会が開催された九六年四月三〇日であった。

アンケート用紙を各大学に送付したのが一九九五年九月、完成に至るまで在京の刊行助成部会担当者の協力を仰ぎながらの作業であった。

このアンケート調査は今回で二回目であり、第一回のアンケート調査結果は一九九二年版としてまとまっている。

第一回の一九九二年版ではアンケート調査対象校は三十三校、刊行助成制度を有している大学は六九校であった。それが今回の一九九五年版ではアンケート調査対象校が四〇七校、刊行助成を制度化している大学が八九校、制度化はされていないが、何らかの形で刊行助成を行っている大学が四一校、合わせて一三〇の大学が学術研究成果の刊行助成を実施しているという結果が出ている。

●刊行助成と大学改革

学術研究成果の刊行助成を実施している大学が、三年間

でどうしてこれだけ増加したのだろうか。四年制私立大学の総数も増えたが、大学数の増加にその理由を求めるのは単純にすぎるだろう。おそらく大学改革にその原因があるのではないだろうか。

一九九二年の大学設置基準の改正は、大学の質的充実に求め、「教育内容の制度的枠組みの大幅な簡素化」「自己点検・自己評価システムの導入」「生涯学習に対応した制度の整備」を骨子としていた。これによって大学は自主的な改革と自己評価という、見えざるエネルギーに突き動かされることとなった。

大学改革というと、カリキュラムの改革や授業評価あるいはセメスターなどの教育体制の制度的な側面が強調されがちだが、大学設置基準改正省令の第一章「自己評価等」には「教育研究水準の向上と教育研究活動の状況についての自己点検・自己評価」が明記され「その要件を満たすために適当な体制を整えること」が規定されている。つまり、大学の質的な充実は教育と研究の双方に求められ、そこに自己点検・自己評価がセットになっていると理解すべきであろう。

このことを東海大学の例で見ると「教育と研究は、高等

教育機関の両輪である。一方、社会からはより高い研究がますます要請される傾向にある。学園内各機関における広範・多岐で多様な自主的な研究活動を支援するとともに（中略）個々の研究活動の有機的結合や強化、推進を図る」ことを目的として、様々な支援システムが構築されている。この支援システムの中の「研究設備拡充支援」に学術図書刊行補助（刊行助成）は位置づけられている。

これは東海大学の例にすぎないが、大学改革の渦中にある多くの大学は、それぞれの実状に基づいて改革を進め、刊行助成も単なる出版補助ではない位置づけがなされているはずである。

ここで、第一回の「私立大学における学術研究成果の刊行助成についてのアンケート調査」が行われたのが一九九二年であったことを思い出していただきたい。大学設置基準の改正省令が施行された年度である。それから三年、第二回のアンケート調査は大学改革の進行する中で行われた。刊行助成を実施している大学一三〇という数は、このような視点から眺めた時に、初めてその意味合いが理解されるのではないだろうか。深読みに過ぎるだろうか。

●アンケートに見る刊行助成の課題

しかし、一三〇大学の学術研究成果の刊行助成の実態は、一言で言えば千差万別・多種多様である。しっかりした制度を持ち、着実な成果を積み重ねている大学がある一方で、刊行助成を始めたが実績が伴わない、あるいは折角の成果

が社会に還元されていない、大学への納本部数が多すぎる等々の問題が散見される。これらの問題については、法政大学出版局の平川俊彦氏による詳細な分析があるので是非ご一読いただきたい（『IDE 現代の高等教育』No. 376 民主教育協会 一九九六年五月号）。

大学改革の更なる展開の中で、学術研究成果の刊行助成を実施する大学はますます増えてゆくであろう。第二回のアンケート調査を見ても、一八の大学が刊行助成の制度化を考慮・検討中と回答している。

●アンケート調査を終えて

しかし、刊行助成を制度として持つことと、出版活動とは必ずしもイコールで結ばれるわけではない。上記のような出版に関わる基本的な問題点も増加してくるであろうし、われわれがそのような刊行助成の局面に立ち会う可能性も考えられる。

法政大学出版局の平川氏は、刊行助成部会の仕事として「助成出版マニュアル」の必要性を常々強調している。その是非はいま置くとしても、増加する私立大学の刊行助成制度と大学出版部協会（刊行助成部会）という構図の中で、学術研究成果の刊行助成を改めて捉え直し、大学出版部協会が全国の私立大学に向けて何を発信できるかということ、大学改革という現実に重ね合わせて考えた場合、刊行助成部会のような試みや取り組みは大きな意味合いを持つてくるかもしれない。

（東海大学出版会編集課）

こんな時代だからこそ「古きも学ぶ」

江戸東京博物館を訪ねて

新宿よりJR総武線に揺られて二〇分。西国駅のプラトホームに降り立つと、まず西国国技館が目に入る。横綱の土俵入りのようにやけに重心の低い、どっしりと安定した建物である。その相撲の殿堂を隣から見下ろすように並び立っているのが、江戸東京博物館である。

館内施設は、有料ゾーン（一階「企画展示室」「映像ホール」、五・六階「常設展示室」と無料ゾーン（七階「図書室」、一階「ミュージアムショップ」、地下一階「映像ライブラリー」、その他レストラン・喫茶、貸し出し施設等）に大きく分けられている。限られた時間で行く場合は、とりあえず「六階直通エレベーター」に乗って、常設展示室へ行くことをおすすめする。入り口には、黄色いベストが目立つ案内嬢がいて、「いらっしゃいませ」と笑顔で迎えてくれることだろう。

入場するといきなり、日本橋がある。実際には、二八間（約五一メートル）ある橋の、北側一四間分のみを復元したものだという。これを渡りきると「江戸ゾーン」に入る。

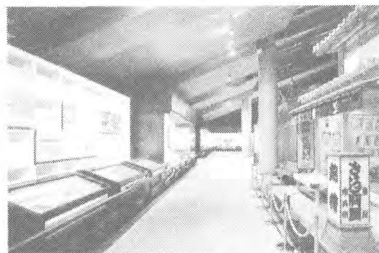
常設展示室は、その他「通史ゾーン」と「東京ゾーン」を合わせて三つに分かれており、一時間半から二時間で観覧できる規模である。

館内は、グレーのカーペットが敷かれ、資料保存のために薄暗くしている照明とあいまって全体にシックな印象を醸しだしている。ところどころに青と紫のツートンカラーのソファが設置してあるので、年輩の方でもゆったりと楽しめる環境になっている。

☆ ★ ☆

本と人間文化のかかわりは、写本などの時代から含めれば、人類の歴史のなかでかなりの長さを誇る。だが、現在行われているような印刷技術を伴った近代出版の原点という点、日本の場合、江戸時代に入ってからのことになるだろう。そういったわれわれ出版人の最大関心事であるコーナーは、五階の一角に「出版と情報」と題して用意されている。

まず、銅活字による印刷として、徳川家康が作らせたと



常設展示室「出版と情報」コーナー

いう駿河版活字で組んだ『群書治要』と『大蔵一覽集』、また、木版印刷関連では『善光寺道名所図会巻四』の版木が飾られている。

続いて、江戸時代の出版史のダイジェストともいえる事柄が順次説明されていく。江戸時代の出版業は、まず京都で発達しており、江戸出版界は京都の出店に支配されていること。だが、一七二一年に書物問屋仲間（学問的な書物を出版）と地本問屋仲間（草双紙などの戯作や錦絵を出版）が成立したことによって、江戸の出版界も発展の方向へ歩みだしたこと……。われわれ大学出版部は、江戸時代であれば、書物問屋仲間ということになるのだろうか。

☆ ★ ☆

入るときには気づかなかったが、エスカレーターの前に石碑が建っていた。

江戸東京の歴史と文化の殿堂

新しい都民文化創造の拠点として

ここに東京都江戸東京博物館を

設置する



江戸東京博物館（左隅が両国国技館）

江戸東京博物館

〒130 東京都墨田区横網 1-4-1

TEL (03) 3272-8600

開館時間：10～18時（木・金曜日は20時まで）

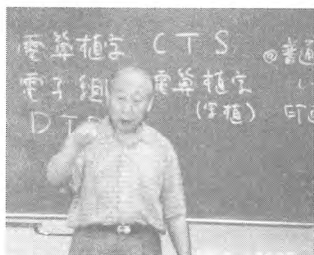
休館：月曜日（月曜が休日の場合は、その翌日）

12月28日～1月4日

交通：JR両国駅西口下車徒歩3分

いまや世の中も出版界も、マルチメディアばやりである。こういう新しい流れは大いに学んでいくべきだろう。だが、新しいものの創造が、古いものの蓄積によって生まれることを思えば、過去の尊い遺産もおろそかにはできない。今後、出版界はより激しく進化していくことが予想される。だからこそ、新しきを追求しつつ古きを知れることも忘れてはならない、と考えさせられた訪問であった。

（玉川大学出版部・高野修司）



拡大編集部にて 野村保恵講師



夏季研修会にて 黒木重昭氏

▼第15回「日・韓大学出版合同セミナー」
▼第1回「日・韓大学出版共同図書展」

日韓の大学出版部協会が交流を始めて十五年、「合同セミナー」も今回で15回目を迎えることとなった。日程は10月27日(日)から29日(火)まで、会場は韓国江原道の雪岳教育文化会館、主題発表は韓国側が「著作権問題に関して」、日本側は「日本における大学出版部活動の現状」について報告する。日本側代表団は十二出版部・十八名の予定。

これと並行して、第一回「共同図書展」の開催が決定した。期日は10月26日(土)から11月2日(土)までの八日間、ソウルの書店・教保文庫にて、日本側からは約一二〇〇点・二〇〇〇冊の書籍を展示・販売する予定。現在、営業部会が中心になって準備作業を進めている。

▼第15回「編集者の集い」

編集部会では「学術専門出版とインターネット」と題して、本年度・第15回「編集者の集い」を開催することになった。日時は10月11日(金)13時30分より17時まで、会場は東京電機大学理工学部第二会議室(埼玉原鳩山町)。それに先立ち、出版界におけるインターネット利用状況について約一七〇社へのアンケートを実施した。この分析結果は当日会場で発表すると共に、本誌次号でも報告する予定である。

北海道大学図書刊行会

▼荒川泓「エネルギー・3つの鍵——経済・技術・環境と二〇三〇年への展望」(四六判、四七二頁、三九一四円)

本書の帯には、「社会の持続的発展とその条件/原発なしの、環境と両立するエネルギー・プラン」とある。

原発に反対する人は多数いるだろう。だが、予想されるエネルギーコストの相対的上昇を前提に、「原発を即廃棄したうえで、環境と両立させながら社会の持続的発展をはかる方法がある」と自信をもって言いきることできる人がどれほどいるだろうか。

本書はまさに、そのための条件を、今後三、四十年を念頭において、日本の特殊性をも加味しながら、経済、科学・技術、環境の三つの側面から具体的・全面的に提言したものである。

「エネルギー」と名のつく本は巷にごろごろしているが、不思議なことに、「エネルギー問題」を総合的・系統的に取り扱ったものはほとんど存在しない。本書は、技術、経済の双方に通じた著者の手になる、その数少ない一冊であり、説得力あるオプティミズムの書なのである。

聖学院大学出版会

▼E・ブルンナー著『正義』（寺脇不信訳）は、十一月発売予定。

▼著者（一八八九～一九六六）は、スイスの神学者で、一九五四～一九五六年までは、国際基督教大学で客員教授をつとめられ、日本の神学界のみならず、一般の学生にも多大な影響を与えた。「自然神学論争」の結果、E・バルトと訣別したことは、あまりにも有名。

▼『正義』の原書は一九四三年に発行され、最初の邦訳として、当時早稲田大学教授であった酒枝義旗氏の翻訳が、一九五二年に出版された。今回の全面的改訳は、京都文化短期大学教授である寺脇不信氏によるもの。

▼基礎論においては「正義と法」、「正義と愛」、「人間の不平等と共同社会の諸権利」などの問題と取り組み、第二部の各論では、家庭・経済・社会・国家・国際秩序の正しいあり方を論じる。

▼本書には、スイスの著名な法学者W・ケーギによる序文が、はじめて訳出されている。巻末には、詳しい「訳者あとがきにかえて」がある。キリスト教社会学理を知る上で欠かせない名著。

慶應義塾大学出版会

（旧 慶應通信）

▼高野守正著『詩の真実とことば』一七人の詩人たち』（定価二九〇〇円）

窪田空穂、リルケ、タゴール、ツァラ、ロルカ、ツェラン、ボンジュの作品を題材に、詩が持つ真の力について考察する。詩が日常を超える瞬間、詩人の心から真実が噴出する瞬間に着目した、新しい詩の読み方を提示。「詩人は、言語の霧を吹き払って、世界との直接的な触れ合いをもたらし、新たな世界の発見に導いてくれる。詩とは言葉の響きやリズムによる音楽に終始するものではない。詩とは真実の告白である」（まえがきより）。

▼F・フュレ他著／大宅・神吉・奈良訳『20世紀を問う—革命と情念のエククルー』（定価二八〇〇円）

今世紀、人々の思想を支配し、行動へと駆り立てた二つの大いなる全体主義的誘惑——ファシズム、そしてコミュニズム。20世紀を独自のものにしていくこれらのイデオロギーを中心に据え、我々の「歴史体験」が一体何だったのかを問い直す。それは、我々の周辺をいまだ徘徊しているイデオロギーの亡霊たちを完全に葬り去るための「喪の仕事」である。

産能大学出版部

▼『「ネットワーク型」価値創造企業の時代—アライアンスによる新事業戦略』（R・ノルマン/R・ラミレス共著、中村元一／崔大龍訳、二五〇〇円）

マイクロ・プロセッシング技術の飛躍的な発展によって、企業経営の仕組みそれ自体が、いま大転換プロセスの途上にある。二一世紀へ向けての企業は、伝統型の「価値連鎖」へのアプローチに決別して、現代型の「ネットワーク型価値創造」のアプローチを積極的に取り入れる必要がある。すなわち、サプライヤー、顧客、パートナー企業など多くの利害関係者を幅広く巻き込んで、ネットワーク型の「共同価値創造システム」を効果的に構築し、それを柔軟・迅速に運用する必要がある。

本書は、自社の中核能力および顧客企業の事業基盤の間の、不断のインターフェイスを通じて、ネットワーク型の「共同価値創造システム」を構築・運用する実践的なノウハウを提供している。本書は、欧米諸国において、企業マネジャー、コンサルタント、経営学者にとっての必読の文献になっている。

専修大学出版局

▼池本卯典、他『血液型の遺伝子』（定価四六三・五円）

ヒトの血液の謎解きが始まったのはそう昔のことではない。一九〇一年、ラントシュタイナーがA B O式血液型を唱えて以後のことである。それからは適合輸血、溶血性貧血の診断、個人識別や集団遺伝学領域における調査標識などの用途目的から、また近年は分子生物学的解析法の導入などにより、急速に研究が進展した。

本書は自治医大法医学・人類遺伝学教室のメンバーがそれぞれテーマを受け持ち、新しい海外の文献情報も取り込みながら、ABO、Rh、MNSsU、Lewis、Duffy、Kellなどの血液型システムの抗原構造やその遺伝子について考察している。さらに血清・血球タンパク質多型などにも論考を広げ、アレルの遺伝子解析や、クローニング、塩基やアミノ酸の置換、遺伝子内での組換えなどを組上にのせている。赤血球多型の研究を端緒に、構造解析から今や機能の研究にまで肉薄しようとしている血液型研究の成果が盛り込まれた好著といえよう。

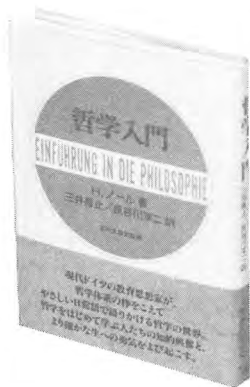
玉川大学出版部

▼日・ノール／三井善止・長谷川洋二訳『哲学入門』（二四七・二円）

二〇世紀を代表する思想家が哲学用語にとらわれずやさしい日常語で語りかける哲学の世界。歴史のなかで繰り返し表れてくる典型的な体系に哲学を関係づけながら思索を展開する。はじめて哲学を学ぶ人たちの知的興奮とより確かな生への勇気をよび起こす。

▼矢野眞和『高等教育の経済分析と政策』（四七三・八円）

授業料が上がっても、私学助成は頭打ちの昨今。教育にかかる膨大な費用は誰が負担すべきかという議論が盛んである。本書は、政府と家計、私学助成、労働市場などの視点から、高等教育の経済問題を実証的に分析する。



中央大学出版部

▼中央大学社会科学研究所編『革命思想の系譜学 宗教・政治・モラルイティ』（二九一・四円）

いま、なぜ革命思想を問い直そうとするのか。「ベルリンの壁」の崩壊をきっかけにはじまる社会主義諸国の解体は、激動の時代の幕開けであった。自由・平等・満ち足りた生活、そしてなによりもいっさいの抑圧のない人間解放という高邁な理想を掲げた社会主義が、その理念とは裏腹に、現実には権力を掌握したとき、人間にたいする抑圧をもたらす機関となり、不可避免的に経済的破綻、道徳的墮落と退廃へ導くものとの印象を多くの人々に与えるものへと変貌した。いまさら社会主義を論じ、それを創造する手段としての革命を問う意味はあるのかと反問されるかもしれない。イデオロギーの終焉、階級対立の解消、支配―被支配の二項対立図式の見直し、史的唯物論の破綻など、さまざまな否定的な議論が展開されてきた。

だが、革命思想や社会主義の理念はそのまま葬りさらされるべきなのか。本書は、この問いに否と答えるための試みである。

東海大学出版会

▼『中国サル学紀行―黄山に暮らす』和田一雄著（A5判二六六頁・定価二五七五円）

本書は安徽省の黄山（ホワンシャン、世界遺産条約に基づいた保護区で、動物の宝庫、中国の山岳観光の中心）の農村に、著者が住み着いて得た貴重な体験と、サルのユニークな生態や社会行動を生き生きと描いたサイエンスエッセー。

▼『海洋の波と流れの科学』宇野木早苗 久保田雅久著（A5判三七〇頁・定価三九一四円）

水の惑星、地球生命の源といわれる海洋。いっぽう強大な破壊力を持ち、かつ想像を絶する高圧が支配する暗黒の世帯。ある意味では宇宙開発より難しく、地球上での最後のフロンティアと呼ばれる海洋。海洋には、潮汐、津波、高潮、風波生成の謎、黒潮、渦、エルニーニョなど、重要で魅力的な多くの問題が残されている。本書はさまざまな海洋物理現象について、波と流れを中心に細心の研究成果を取り込みながら、現実の事態と仕組みが理解できるように、やさしく解説する。

東京大学出版会

シリーズ「熱帯林の世界」全7巻の刊行が九月から始まった。第一巻『森林彷徨』（伊谷純一郎著）、第二巻『トーマのすむ森』（大塚柳太郎著）からスタートし、以後『森を語る男』（加納隆生）、『吹矢と精霊』（口蔵幸雄）、『森の食べ方』（内堀基光）、『共生の森』（寺嶋秀明）、『水の国の歌』（木村秀雄）と続く（各巻税込二二六六円）。

熱帯林は、豊かな植物と動物たちにいるどられ、精霊とともにすむ人びとをその要素とする「近代」の対極に位置する世界である。いまや「自然」の象徴とさえいえるこの世界の住人たちは、自然にとけこむように生気あふれるマイクロモスを創りだしてきた。本シリーズはこの熱帯林の住人たちと、自然についての認識を共有してきたフィールドワーカーが、それぞれの熱帯林で生きつづけてきた人びとの織りなす世界を描きだす。

地球環境問題を解決するための鍵のひとつが熱帯林にあるといわれるが、その森林は語られても、その主人公たちの姿は浮かびあがってこない。かれらの素顔を知ること意図して編まれている。

東京電機大学出版局

コンピュータユーザーならTCP/IPの名を、インターネット標準の通信規約（プロトコル）として一度は耳にしたことがあると思う。ほぼ二〇年前に開発が始まり、UNIXに標準装備されたことで世界中に普及した。汎用性があり、簡便で標準化が進んでいることなどから、その後、広い範囲のコンピュータネットワークでも使われ、最近になって一般的な言葉となった。ネットワークのエンジニアにとってTCP/IPの知識は、必要不可欠といえる。

本書は、TCP/IPを構成する主なプロトコルの機能と構成の説明に重点を置いている。また、実際に使われている標準的な機能を取りあげているため、エンジニアが仕様を理解し、機能の必要性を理解できるようにしている。



ネットワークエンジニアのためのTCP/IP入門
都丸敬介著
A5判、200頁、定価2266円

東京農業大学出版会

▼『名園のみどころ―日本庭園一六〇を解説―』（河原武敏著、一八〇〇円、三四頁）

旅行社の企画では、お寺や庭園をめぐることも多いようであるが、庭園に関しては、だいたい寄る場所は決まってしまうようである。例えば、京都では龍安寺の石庭とか、金閣寺の庭園など。お寺めぐりのついでにという感じもある。

それでは満足できないという方に、仲間同士で、あるいは個人で名園めぐりをしてみたいという方に、是非この「名園の見どころ」を利用していただきたいと思う。

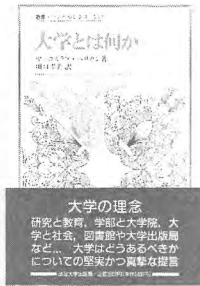
この本は、著者が何度となく訪れ、鑑賞のポイントや、作庭由来、さらに庭園の平面図を書き著したものである。青森から沖縄まで一六〇の名園が精選されているので、利用範囲も広い。さらに巻頭には、名園の位置図が示されているので、名園めぐりの計画を立てるのにもたいへん便利である。

庭園鑑賞の楽しみがさらに増し、味わいも深くなっていくことは、間違いない。

法政大学出版局

▼ヤロスラフ・ペリカン／田口孝夫訳『大学とは何か』――三五〇二円

その本質と目的、研究・教育活動を支える基本原理、社会的機能と現実、図書館や出版部の役割など、マクロな視点から大学の諸問題を具体的に指摘する。人間の理性と知識の絶対的価値への深い信頼にもとづく真摯かつ堅実な提言は、すべての大学人に大学の原点への帰帰を迫らずにはおかない。〈大学の危機〉の認識のもとに、J・H・ニューマンの古典的名著『大学の理念』を発展的に乗り越えた野心的な大学論である。



▼V・H・H・グリーン／安原・成定訳『イギリスの大学』――四九四四円

▼H・W・プラーレル／山本允訳『大学制度の社会史』――四二二〇円

放送大学教育振興会

放送大学の現在関東地域のみでの放送授業が、平成九年十月より「通信衛星（CS）」のデジタル放送を利用し、全国どこでも受講可能になる。受信にはCS受信用のチューナー、アンテナが必要。同時に、すでにかなり普及している「放送衛星（BS）」による全国化は、平成十一年打ち上げのBS-4の後発機を利用する計画で、将来的には、地上放送、CS、BSの三本立てとなる予定である。

一方、全国化に向けての準備は着々と進行中。放送大学では、カリキュラムの整備、教授陣の強化はもちろん、①学習センター（放送エリア内。面接授業、単位認定試験、学習指導・相談、放送番組の再視聴、図書の閲覧・貸出しなどの施設）、②地区学習センター（放送エリア外。放送授業のビデオテープ、オーディオテープを利用して、社会人などへの大学教育の機会の提供）を年々拡充。①九箇所、②三十一箇所、合計四十箇所に設置。未設置の九箇所も、二年程度ですべて設置の予定。当振興会でも、印刷教材の制作関係、配布関係その他に、各プロジェクトが真剣に取り組んでいる。

明星大学出版部

▼福島茂明・森竹英世・菱山覚一郎共著『社会科学教育の本質を探る―理論と実践の結合―』A5判 定価三七〇八円

本書は社会科学の性格、目標、内容等、理論的な面について書かれた『社会科学教育』の姉妹編である。従って『社会科学教育』との内容の重複をできるだけさけるため、内容は社会科学の教材教具、指導要領、授業計画、評価の方法等、社会科学の事例をふんだんに取り入れながら社会科学教育の本質を明らかにしている。とくに資料編で扱った学習指導要領社会科編I昭和二十二年版(試案)は、わが国における最初の社会科学学習指導要領であり、社会科学の性格や意図・各学年の指導例などが詳しく記述されており、極めて示唆に富む内容となっている。

▼野口京子著『性格心理学―自己理解のために―』現在進行中の本書は、性格心理の概説書として執筆された。学説の紹介とともに、自ら性格を知り、性格の成長と変化について焦点をあてて書かれている。主な内容は、性格の理論・性格の論のかたより・現代社会と性格改善・性格理論の方法。

早稲田大学出版部

▼早稲田大学理工総研シリーズ⑦『安心できる都市』(尾島俊雄、定価一〇〇〇円)を刊行した。安心して暮らせる都市の条件とは何か。長安、古代ローマなど歴史上の都市の盛衰をあとづけ、現代の諸都市の実情を点検して、わが国の都市基盤整備の遅れに再考をうながす。

▼『フランスの行政』(下條美智彦、定価三〇〇〇円)は、フランス全土にわたる一〇の地方に現地調査を試み、日本が学ぶべき個性豊かな行政活動を紹介する。最新データを駆使して、統治の機構と制度、地方行政制度の歴史、コミュニティの自治など、フランス行政の全容をとらえた決定版。既刊『イギリスの行政』(下條美智彦、定価二八〇〇円)と合せてのご購読をおすすめします。



名古屋大学出版会

▼森際康友編『知識という環境』(定価三九一四円) 知識とはどのように成り立ち、また何の役に立つのか? 知識観の分裂をもたらした近代主義的知識論を批判しつつ、日常的知覚の場面から暗黙知あるいは科学知などへと広がる知識の領域とそのリアルな姿を求めて、社会的環境・システムとしての知識構想を展開した白熱の論集。

▼池上英雄他編『核融合研究I(核融合プラズマ)』(定価三〇九〇〇円) 人類の究極のエネルギー源と考えられる核融合エネルギーの実用化にむけて実施された学際的共同研究の成果。本巻では概論、プラズマ診断・理論、コンピュータシミュレーションなどを扱う。『核融合研究II(核融合炉工学)』は発売中。

▼高柳泰世他編『見えない人 見にくい人のリハビリテーション』(定価二五〇〇円) 中途視覚障害者の家庭復帰、社会復帰をより早くするための総合リハビリテーションを紹介した、この分野では初の成書。障害された目を使わずに、他の感覚で代行するという訓練に長年携わった医師が実践法を詳述する。

■九州大学出版会

日本型ジャーナリズム―構造分析と体質改善への模索―

山下 國誥 二七八―一円

会計的業績管理モデルの研究

浜田 和樹 五九七―四円

マルチメディア環境と経済学

児玉正憲・岩本誠一編 三二九―六円

Integration of Eastern and Western Psychosomatic

Medicine

池見酉次郎編 五一五―〇円

沖縄の疾病とその特性

琉球大学医学部附属地域医療研究センター編 五一五―〇円

文明批評家モンテスキュー―『ペルシア人の手紙』を読む―

西嶋 幸右 二二六―六円

転換期の経営と技術（九州産業大学公開講座9）

二〇〇―〇円

海外情報と九州―出島・西南雄藩―

姫野順一編 二〇〇―〇円

■流通経済大学出版会

■大阪大学出版会

現代数学序説（I）

川久保勝夫・宮西正宜編 二三六―九円

▼前号の筆者「マルチ坊主」氏に宿題を押しつけられてしまったが、氏は相手を間違ったようだ。自慢じゃないが子どもの頃から、宿題をきちんとやったことがない。校了は目前に迫っているのに、あ、どうしよう！そもそもテーマが大きすぎる。

「学術書の電子化」について書くにはスペースもないし、それ以前に知識も力量もない。仕方がないからインターネットと出版に関して、思いつきを記してお茶を濁すことにしよう。

▼編集部が主要出版社（約一六〇社）に対して実施した「インターネット利用状況アンケート」は現時点では集計中だが、インターネットの利用によって「流通販売に変化がある」という認識は、ほぼ共通している。しかし「決済の方法、マルチメディア著作権の問題がクリアされなければ……」という意見が多いようだ。それに加えて先頭に立ちたがらない出版業界の体質もある。学術専門出版に限っても、インターネット出版の具体

的なかたちはまだ見えにくい。▼では、今のところ何もできないのかといえば、そうでもあるまい。学部の記事などは、今すぐにもインターネット出版が可能なのは。つまり、基本的には無料で配布する性質のものであるから、良くも悪しくも流通「革命」を引き起こす可能性はない。執筆者も読者も、大半

●製作の現場から 15

学内から始める ネット出版

は大学の教員であり、研究室にはたいていパソコンがある。なれば研究費で購入することもできる。そのパソコンは大学のサーバを通じて無料でインターネットに接続できる。条件はすでに整っているといえよう。

▼具体的にはどうするのか。まず、論文を発表する教員はすべて自分のホームページを持たなければならぬ。大学から割り

当てられたディレクトリを使用するか、プロバイダと契約するか、自分でサーバを立ちあげるかは自由である。大学のサーバを利用する場合でも、大学は内容に参与してはならない。インターネットの核は、あくまでも個人なのだ。「トップダウンで決められたストラクチャーではなくて、ラフなコンセンサス。みんながバラバラに生きていても、ゆるやかなコンセンサスがあればだいたいうまくいく……」（村井純『インターネット』岩波新書）というインターネットの思想は大事にしたいと思う。

▼それでは紀要の体を成さないではないか、といわれるかもしれない。そこで編集委員会が登場する。委員会は独自のホームページを持つが、ここに論文を掲載するわけではない。執筆者は論文を自分のホームページに発表したら、URL（所在地）と表題、キーワードを委員会に連絡する。委員会は表題のみをホームページに掲載し、執筆者のサイトにリンクを張る。同時にキーワード検索ができるよう

に設定する。これだけで読者は、執筆者のサイトがどこにあるかと、次々と論文を読んでいくことができるのである。印刷と違って費用はほとんどかからないから、連絡のあつた論文にはすべてリンクを張る。水準の維持の問題があれば、レフェリーが査読した上で、パスしたものは印を付けるなどの工夫をすればよい。案外、「無印良品」が出てくるかもしれない。

▼なお、ホームページを作成するために、HTML（Hypertext Markup Language）という記述方式で書かなければならない。Languageという単語を見たときにBASICなどのプログラミング言語を思い浮かべ、逃げ出してしまふ人もいるようだが、まるで別のものである。凝ったレイアウトをしようとするればかなりやっかいだし、編集者から見れば大雑把すぎる記述方式でもあるのだが、普通の論文を載せるだけであれば、拍子抜けするぐらい簡単であることを申し添えておきたい。（キヨウ貧乏）

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会 (旧慶應通信)	〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-3584 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭徳ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-3717-4346
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4238 FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 0427-39-8935 FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1 TEL. 03-5228-6271 FAX. 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 0425-91-9979 FAX. 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市中種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-368-1121 FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
流通経済大学出版会 (準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
大阪大学出版会 (準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX. 06-877-1614

大学出版(第31号)'96秋 平成8年10月1日発行 発行所/大学出版部協会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956
頒布価格100円 ㄱ共